

北海道洞爺高等学校

問い合わせ先：0142-82-5053

I 学校の概要

1 児童生徒数、学級数、教職員数

生徒数63名（1年生19名、2年生28名、3年生16名）、学級数3、教職員数16名

2 地域の概況

洞爺湖町は、活火山の有珠山や昭和新山、北海道有数のカルデラ湖である洞爺湖など豊かな自然環境に恵まれており、校舎も支笏洞爺国立公園特別区域に隣接し、環境教育推進の好条件に恵まれている。

3 環境教育の全体計画等



以前からボランティア活動として、地域内にある国立公園の美化清掃活動を定期的に行い、生徒にゴミ問題を意識させるとともに、自然環境保全の重要性を認識させている。また、教科「理科」や「総合的な学習の時間」において、国立公園の自然に直接触れることができる立地条件を生かした環境教育を展開している。さらに、今年度はG8北海道洞爺湖サミットが開催され、環境に関する地域的な取組に参画した。

II 研究主題

- 1 環境問題に関する地域の自然環境と人間生活とのかかわりについての研究
- 2 環境の変化についての定期的・長期的な研究

III 研究の概要

1 研究のねらい

- (1) 地域の自然環境と人間生活のかかわりに関する科学的な調査を実施し、地域の環境保全を科学的な視点から生徒に考察させる。
- (2) 定期的・長期的な調査を継続して実施し、この地域の自然環境と気象現象、季節変化、他の地域とのかかわりについて、生徒に考察させるととも

に、地球的視野での環境保全について理解を深めさせる。

2 校内の研究推進体制

- (1) 洞爺湖の各区域の水質の継続的観測（平成19年度からの継続）
- (2) 洞爺湖の自然観察（洞爺湖内の地形、動植物の季節変化の研究）
- (3) 洞爺湖周辺における人々の生活状況の調査（ゴミ、生活排水などの調査）
- (4) 外部講師による講演会や実技研修の実施
- (5) 近隣の学校や地域と一体となった環境保全活動の展開

※ これらの調査を数年～10年と継続的に行い、長期的な環境の変化が及ぼす人間活動への影響などを考察する。

3 研究内容

- (1) グローブの教育課程への位置付け
 - ① 第1学年の「総合的な学習の時間」において、「環境」について学習し、洞爺湖の観察や水質調査の体験学習を行った。
 - ② 第3学年の「理科総合A」の授業において、洞爺湖の水質調査を行った。



- ③ 第2学年の「理科総合B」の授業において、洞爺湖の動植物の観察実習と生物調査を行った。



- ④ 第3学年の専門教科家庭「課題研究」において、洞爺湖周辺のゴミの処理について研究した。



- ⑤ 「総合的な学習の時間」における「ネイチャー体験」選択者は、地域の専門家による湖畔の動植物や湖の地形についての観察講習を受けた。



(2) グローブを活用した教育実践

- ① 生徒の専門知識の習得による課題意識の高揚や指導教員の研修を目的として、外部講師による講演会を実施した。



- ② 本研究推進のため、地域の専門家や研究機関(北海道大学洞爺湖臨湖実験所など)の指導を受けた。
- ③ 地域や外部団体の活動に積極的に参加した。

IV 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 水質調査を行うことにより、生徒が洞爺湖への関心を高め、洞爺湖の水はきれいであることが分かった。時期、場所、水深による水質の違いを確認することができた。この水質の違いには、人間の生活、農業排水や湖の生物の活動がかかわるのではないかと予想され、次の課題を見付けることができた(詳細は実践報告書を参照)。



- (2) 水質調査以外にも、各教科、家庭クラブ活動、学校行事などのあらゆる場面において、環境にかかわる取組が行われるようになった。また、校内に環境教育推進委員会が設立され、各教科等が別々に行っていた環境にかかわる取組を集約することができた。
- (3) 「家庭科」の調理実習や被服実習、「商業科」の販売実習を組み合わせ、地球環境保全をテーマとした地域活動E C Oプロジェクトを展開し、本校生活ビジネス科における専門教科の特色を生かすことができた。
- (4) 「クリーン洞爺」、第3学年「課題研究」、「洞爺ネイチャー体験」、「ウチダザリガニ防除体験」など、地域と連携した活動を通して、身近な環境への理解を深めることができた。



- (5) 「北海道高校生環境サミット」に2名の生徒が参加し、本校の環境問題への取組について発表すると

ともに、高校生サミット宣言の起草にかかわることにより、環境保護の意識を高めることができた。これに続いて、「J 8サミット2008千歳支笏湖 環境と未来を語るつどい」、「JUNEC洞爺湖サミット 2008」、「環境教育リーダー研修基礎講座」、「いぶり高校生環境サミット」に参加し、活動の発表や交流を通して、他校の生徒などの環境への取組や考え方を知ることにより、視野が広がり、これまでの取組の工夫・改善や新たな取組への意欲が向上した。また、それらの活動を通して、生徒のプレゼンテーション能力を高めることができ、学校生活への積極性が見られるようになった。



- (6) 環境講話を通して、生徒、教員ともに洞爺湖の自然環境を科学的にとらえることや、地球温暖化等の環境問題について深く考えることができた。
- (7) 研究を進めるに当たって、大学、環境省北海道環境事務所などの専門機関と連携することができ、活動範囲を広げるための基盤ができた。

2 課題

- (1) 学校主催の成果発表大会を実施する必要がある。
- (2) 学校全体として自然に対する科学的な見方や考え方を育成することができなかったことから、全校生徒が活動することができるように実施計画を工夫・改善する必要がある。

V 今後の展望

- 1 今年度までの活動を継続するとともに、生徒、教員ともに環境に対する意識をさらに高めることができるように、環境教育計画を作成し、組織的・計画的・継続的に取り組み、環境教育を一層充実させたい。
- 2 水質調査においては、観測データを蓄積し、様々な角度から分析する。具体的には、洞爺湖周辺における人々の生活状況の調査や、湖の生物の調査を行い、水質への影響を分析する。また、理科の授業において、全生徒に環境調査を体験させたい。
- 3 地域に向けた学校主催の成果発表大会を実施するなど、研究の成果を発表する機会を設けたい。